

デリダにおける「超越論的暴力」

「暴力と形而上学」をいかに読むべきか

鈴木康則(桑沢デザイン研究所)

デリダが「暴力と形而上学」において提起した「超越論的暴力」という概念は、一体どのような内実をもつのだろうか。この概念はレヴィナス批判の文脈において登場していたものである以上、多くの論者が注目するように、レヴィナス哲学との関係を考察することは確かに必要である。ただしデリダとレヴィナスの二者関係だけに着目するならば、多くの論点が見逃される恐れがある。ゆえに本発表が着目するのは、デリダがレヴィナスを批判するに先立って、「超越論的自我」や「超越論的論理学」(デリダはそれらの問題系を「超越論性 *transcendentalité*」と表現することもある)を幾度も考察の対象としていたことである。デリダが提起する「超越論的暴力」とは、デリダが「超越論性」を受容し、違和感を抱き、そして改変する過程で形成された概念なのである。本発表が辿るのは、初期デリダにおける「超越論性」概念が形成されてゆく位相とその変遷である。この概念形成の内実を辿ることによって、はじめて、デリダがレヴィナス批判において提示した「超越論的暴力」の含意が理解可能となるだろう。

デリダの思想形成については、Edward Baring をはじめ、既に幾つかの重要な著作が現れている。たとえば Leonard Lawlor はデリダとフッサールの関係を取り上げ、フィンク、イポリット、カヴァイエス、タオらの論考を丁寧に辿り、デリダの立場といかなる関係にあるかを綿密に論じている。ただしこの労作においてもなお検討されないままになっている論点が存在すると思われるので、本発表では、まず以下の三点を検討する。

1) フッサール現象学とデリダの関係について。初期のデリダはフッサールの「超越論的自我」および「超越論的論理学」に対し、いかなる態度をとっているのか。

2) イポリットとデリダの関係について。「存在論」、「歴史」、「発生」、「他者」等のデリダが問題化した主題群は、イポリットの『論理と実存』(1953)において登場していたものと字面上は同じである。ではデリダとイポリット(ヘーゲルを含めて)との関係はいかなるものなのか。

3) ハイデガーとデリダの関係について。「暴力と形而上学」において言及されている『形而上学入門』について、デリダはこの時点ではどのような解釈を提示しているか。

第一の論点については、デリダがフッサールを批判する文脈と、フッサールを擁護する文脈の差異に注目する必要がある。『声と現象』(1967)でフッサールを「現前の形而上学」の哲学者として批判することになるデリダは、『フッサール幾何学の起源への序文』(1962)において、カヴァイエスやタオによるフッサール批判に対してフッサール擁護の立場に立っていた。この差異をデリダ思想の進展や転回に求めることは誤っている。なぜか。

この点にかんしては Lawlor の整理がある程度参考になる。Lawlor によれば、デリダの読解には二つの水準(「深い」レヴェルと「表面的」レヴェル)が存在する。フッサールの記述に様々な側面が存在するがゆえに、デリダがフッサールの『デカルト的省察』を称揚しつつも、フッサールを「現前の形而上学」の哲学として批判したことがただちに矛盾を生むわけではない。ただし Lawlor の整理の場合、どちらの解釈が「深い」のか「浅い」のかの問題となるだろう。確認しておくべきは、デリダはフッサールに

賛意を表しつつ、同時にその「超越論性」については不満を持っていたという点である。この不満こそ、おそらくデリダがフッサール以外の哲学における「超越論性」を求める動機となっているだろう。

第二の論点については、「暴力と形而上学」でのレヴィナス批判、とりわけデリダのヘーゲル解釈が問題となる。レヴィナスが『全体性と無限』(1961)で行うヘーゲル批判に対し、デリダはヘーゲルの立場に立ってレヴィナスに反論しようとする。Lawlor はデリダのヘーゲル解釈が、いかにイポリットに由来するかという点について詳細に辿っているが、Lawlor の読解にはここでも問題がある。Lawlor の解釈をそのまま受け入れると、初期デリダの言説の大部分がイポリットの言説によって説明できることになってしまうからである。デリダとヘーゲルの関係は、後日『吊鐘』において表れるような重要性を帯びるのであるが、「弁証法」という語の使用とその放棄という問題を含め、デリダ初期においてヘーゲルとの関連をどの程度読み取れるのかという問題は再考を要する。

第三の論点については、初期デリダとハイデガーとの関連が問題となる。合田正人が指摘していたように、ハイデガーの『形而上学入門』はデリダの「暴力と形而上学」に少なからぬ影響を与えていると考えられる。ハイデガーは『形而上学入門』において「超越論的」という語を導入部において用いているに過ぎないが、ポレモス(争い)とロゴスを同一視し、カテゴリーの起源と考えるハイデガーの思考を「超越論的」なものを見なす余地はある。ハイデガーは「暴力 *Gewalt*」を主題的に取り上げたが、その内実は「超越論的」と呼びうる次元に位置していたのである。

『形而上学入門』で扱われた「暴力」をめぐる問いは、デリダにおいてはハイデガーだけでなく、やがてベンヤミンにもかかわる問題として扱われ、最晩年まで探求が続けられた問題系である。ただし「暴力と形而上学」が書かれた当時は、ハイデガーの仏訳はごく限られたものであったことに注意せねばならない。カーンによる『形而上学入門』、ヴェーレンスとビーメルによる『カントと形而上学の問題』、コルバンによる『存在と時間』の部分訳等である。初期デリダにおけるハイデガーの影響は、上記の文獻的制約の範囲内で検討する必要がある。こうした注意を踏まえ、ハイデガー的 *Gewalt* とデリダの *violence* がいかなる関係にあったのかを考察する。

これらの準備作業によって、ようやく「暴力と形而上学」における「超越論的暴力」という概念の内実を検討することが可能となる。デリダは『フッサール幾何学の起源への序文』の末尾において、「超越論的なものは差異である」と語る。自己は自己に対して「遅れ」てしまっているのであり、この「遅延」こそ絶対的なものだ、とデリダは考える。このような思考はフッサールの現象学というよりも、イポリット的あるいはヘーゲル的思考でもある。「遅延」が還元不能であるなら、自己は常に不安定なものであることになるのだが、この「不安定」は既にイポリットが語っていた事柄である。このような「不安定」が顕わになるのは「ロゴス」においてであり、「ロゴス」はハイデガー的「ポレモス」と重なっている。「超越論性」はデリダにおいて、自らの「起源」への問いかけとして規定されていたのだが、この問いかけという「ロゴス」は「ポレモス」としてしかありえないものなのである。「超越論的暴力」とは、起源との不一致によって生成する否定的契機であり、自己を絶えず繰り延べる「差延」の思考を準備するものだったのである。